② 罰が当たった『欲深爺さん』

昔々の遠い昔の頃、爺さんは山へ柴刈りに行き、婆ぁさんは家で留守をしていました。山で爺さんは一生懸命、鉈で柴刈りをしたためか、我慢ならない程お腹が空いたので、「お昼には少し早いかな?」と思ったが「握り飯を食べてからまた一頑張りするべぇ」と思った爺さんは、今朝 婆ぁさんが握ってくれた握り飯の風呂敷包みを解いたところ、どうした弾か「お握り」が、突然 山の斜面をゴロゴロと転がり出したのです。驚いた爺さんは「これこれ『まんま』何処さ行くでぁー?」と問いながら、慌てて握り飯を追い掛けたが、握り飯は唯「沢の地蔵様へ」と答えて何処までもゴロゴロ ゴロゴロと転がって行き、とうとう沢の地蔵様の方まで転んで行ってしまいました。やっとの思いで地蔵様の所へ辿り着いた爺さんは「もしもし地蔵様今ここへ『握りまんま』が転んでこねぁがたべがー?」と聞いたら、地蔵様は「あぁー来た来た、此の『握りまんま』でねぇべがー?」と言いながら、今朝 婆ぁさんから握って貰った、大きな握り飯を渡してくれました。喜んだ爺さんは「あぁー良かった、地蔵様のお陰様で助けられたと言うものだ、そうでなければ最早、飢え死にする所だったでぁー」と言いながら握り飯を半分別けにし、お礼に土のついていない方を選んで地蔵様にあげました。

半分の握り飯を美味しそうに食べていた地蔵様が言うには、「ところで爺さんやぁー 毎晩暗くなる頃になれば、ここに赤鬼や青鬼共が大勢集まってきて、明け方の三番鳥が鳴く頃まで、一晩中博打を開帳するので、俺は五月蠅くて、眠るにも寝られずに困っているところだでぁー。そこで爺さんに頼みだけれども、辺りで一番鳥が鳴いたら、二番鳥・更に三番鳥と少し時刻を早めて鶏の鳴く真似をしてけねぁべが?そうすれば鬼共が『もう夜明けだなー』と間違って、さっさと帰って行くから、どうか頼むでやぁー」と言うので、爺さんは「よしよし、それなら簡単なことだ、日頃危ない山仕事から、身体を守って戴いている地蔵様の願いなら、一つやって見るべぇー」と早速承知して、その日の晩は地蔵様の後ろに潜んでいることにしました。

やがてその日も辺りが暗くなると、何処からともなく鬼共がぞろぞろと大勢やって来て、お金や着物などのほか、色々な宝物を出し合い、盛んに博打を打ち始めました。然し博打に熱中している鬼共は大丈夫としても、眠いのを我慢している爺さんの方は容易なものではありません。漸く明け方近くになった頃、何処からか「コケコノヨー」と一番鳥の鳴く声が聞こえてきたので、鬼共は「そら一番鳥が鳴いたぞー」と言いながら、大忙しに急いで博打を盛んに打ち出しました。爺さんは此の一番鳥の鳴き声から、少し間をおいて「コケコノヨー」と、鶏の鳴き声の真似をしたところ、鬼共は「そら、二番鳥が鳴いたぞ、急げ急げ」・「いや、今朝の二番鳥はどうも早いような気がするぞ」・「いや、もう明け方に近い頃だぞ」等々と思い思いのことを言いながら、尚も忙しそうに博打を盛んに打ちました。

爺さんは「占めた、あともう一声で終わりだ」と意気込んで、丁度の時間を見計らい「コケコノヨー」と三番鳥の真似をしたので鬼共は大変です。「そらぁー三番鳥が鳴いたぞぉー、間もなく明るくなるぞぉー」とてんやわんやの大騒ぎ。慌てた鬼共は其処彼処に散らばしていた、お金や着物のほか色々な宝物を、皆、置き捨てて大急ぎで山奥へ帰って行ってしまったどさぁー。此の鬼共の置き捨て行った悉くの宝物を地蔵様からお礼に貰った爺さんは、一晩のうちに忽ち大金持ちになり、婆ぁさんと仲の良い幸せな暮らしを送ったどさぁー。

ところが或る日のこと、此の大金持ちになった人の良い爺さんを、羨ましく思った隣の『欲深爺さん』は「婆ぁ様

婆ぁ様、おらぁーあした山へ柴刈りに行くから、大きな『握りまんま』を作ってけれやぁー」と頼んで、婆さんに大きな大きな握り飯を作らせて山に出掛けました。いよいよ山に辿り着いた『欲深爺さん』は、山に着いて間もなく握り飯の包みを解いて見た。しかしなかなか握り飯は転んで行かなかったので、わざと手で押して地蔵様の方へ転がしてやり、沢の地蔵様の所を目当てにどんぐ〳〵走って行った『欲深爺さん』は、「地蔵様地蔵様、今ここへ大きな『握りまんま』が転んで来たけべゃ?それは俺の物だから寄越してけれやー」と言って、地蔵様から受け取った握り飯を二つに別けて、土のついた小さい方を地蔵様へやり、「地蔵様、俺に何か頼み事ねぇべが?何でも引き受けてやるから頼めやー」と言ったら、此の前に良い爺さんへ頼んだ事と同じことを言うので、「占めた確か隣の爺さんの話していたのは此のことだ」と思った『欲深爺さん』は、「よしよし少し難儀なことだけれども、地蔵様のことだから引き受けてやるべぇー」と言って、その晩、地蔵様の後ろに隠れていたところ、やっぱり暗くなる頃になると、鬼共が大勢やって来て博打を打ち始めました。太い金棒を持った青鬼や大きな山刀を腰に差している赤鬼共が大勢いたので、恐ろしくなった『欲深爺さん』は、未だ宵の口だと言うのに遂に明け方を待ちきれず、ぶるぶる震えながら、「コケコッコー」「コケコッコー」「コケコッコー」と思い切って、三番鳥まで立て続けに鳴いてしまいました。

鬼共は「おや、未だ宵の口だぞ」・「こんな鳴き方をする鶏は初めてだ」・「変だぞ、これは屹度贋者だぞ」・「そうだそうだ。三番鳥まで立て続けに鳴く鶏はいる筈がない、捜せ捜せ」などと言いながら、もう大変な騒ぎになってしまいました。とうとう地蔵様の陰から引っ張り出された『欲深爺さん』は、「この間も屹度此の『じじい』の仕業だぞ」と罵られて、打たれるやら蹴られるやら、散々な嬲り者になってしまい、血まみれになって泣いて家に帰ったとさー。家では婆ぁさんが「今日は屹度うちの爺さんが沢山の宝物を背負って来るぞぉー」と思って、うちに有る物や家などを全部燃やし、爺さんの帰りを楽しみに待っていた時だったので、爺さんが遠くから全身を血で赤くして泣いて来たのを、見間違えて「あぁー、うちの爺さん何程嬉しかった事やら、赤い着物を着て歌って来るでゃー」と言って喜んでおったけどぉ。罰が当たった『欲深爺さん』の話はこれでお仕舞いトッピンパラリのプー。